修学期における井上円了の座標（報告）

清水 乞
shimizu tadashi

はじめに

東洋大学は創立百周年を記念事業の一環として、「東洋大学創立百周年史編纂委員会」、「東洋大学創立百周年記念論文集編纂委員会」を組織し、『東洋大学百年史』（六巻八冊）と『井上円了の教育理念』（昭和六十二年十月初版）、『井上円了選集』（二十五巻）の編集を開始した（委員会規定の施行は昭和五十六年六月一日）。その後、編集は法人立の「井上円了記念学術センター」（平成二年四月設立）に引き継がれ、前者は平成六年、後者は平成十六年に完成された。この間、井上円了（以下円了という）関係史料は、「記念論文委員会規定」（略称）に基づいて作られた三研究部会中、特に第三部会による『井上円了研究』（1号～8号）、『井上円了関係文献年表』、『井上円了研究　資料集　第一冊』や「円了センター」（略称）による『井上円了センター年報』、『東洋大学人名録役員・教職員　戦前編』など円了の基本史料（書簡、旅行記、草稿）や周辺史料（雑誌記事、聞き取り）が加わり、円了研究は飛躍的進展が約束されるようになった。とはいえ、関係者の努力にもかかわらず、基本史料の調査・収集は十分とはいえない。現在与えられている史料を手がかりに問題点を指摘し、気長く着実に補充して行かなければならない。

この間、円了関係の研究論文も増えたが、円了の著書（口述筆記を含む）や周縁史料による事例研究が多く、明治時代における円了の歴史的評価と位置づけは明確とは言えない。先の世界大戦にたいする悪夢は、仏教・宗教界は別として、ややもすると円了研究の扉を閉ざしていた。戦後の思想的風潮の制約に左右されたとはいえ、円了の研究者も少なく、大学自体の創立者への取り組みも弱かった。天野才八（「学祖研究室について」『円了研究』7所収）は、昭和三十二年の大学創立七十周年に向けて、古書店での資料収集や円了の巡講日記に記載されている場所での基本史料の探索に就いて語り、併せて昭和三十一年設立の学祖研究室の研究方法は周辺的事例研究が多く、研究室の主要課題は「妖怪学」であったことを報告されている。また、哲学堂で書籍整理をされていた時、子息井上玄一氏の父円了の想いで話など聞き取りに近い体験談があるが、メモの焼失は惜しまれる。個別研究はさて置き、円了関係資料の収集と巡講先への調査が中止されたことも惜しまれる。しかし、こうした断続的努力の集積が今日を在らしめていることに感謝したい。

円了は「田学」に身を置いた「平民的学者」あるいは「哲学者」と自称している。しかし「表面」の円了を一言でいうことは難しい。啓蒙家、哲学者、仏教学者、教育者、学校経営者、僧侶等々、広義・狭義に、研究者の視点によって呼び方は多様である。現在、円了研究のシステムは、ほぼ次のように決まっているのではなかろうか。

第一期・慶応二年、石黒忠悳の私塾に入門してから明治十年、出郷するまでの在郷修学時代。

第二期・明治十年、東本願寺教師教校を経て上京、東京大学予備門入学から明治十八年、東京大学哲学科卒業までの学生時代。

第三期・明治二十年哲学館設立から明治三十九年、哲学館大学退隠までの大学経営・教育時代。

第四期・明治三十九年から大正八年、大連で客死するまでの哲学堂を中心とする修身教会運動・社会教化活動の時代。

大雑把にいれば、十年（誕生から石黒塾入門）、十年（在郷修学時代）、十年（東京大学時代）、十年（哲学館経営時代）、二十年（哲学堂経営時代）と年を刻んでいる。

故飯島宗享教授は「歴史はそのつど現在が作る。現在の人々が作る――前方に向ってだけでなく、後方に向っても。過去の知られた事実への現在の意味付与において歴史は成り立ち、それを教訓とする同じ現在の意味付与において踏み出される未来への歩みが歴史となるからである」（『井上円了の教育理念』序）と、意味深い言葉を遺している。この言葉は、文献史料を通して、過去の人物に接しようとする場合の貴重な教訓である。特に、文言の上で、表面の自己と裏面の自己を区別し、「自伝」の著述を嫌い、巡講の時に行動を共にした随行者の直接的証言がない円了の場合、読者は円了によって伝えられる「事実への現在の意味付与」に努めなければならない。如何なる人であれ、その成長過程には、能動的要素と受動的要素が見られる。能動的要素は「過去の知られた事実への現在の意味付与」の努力であり、これに反して、受動的要素は事実を自明の事とする無自覚な、無意識行動に由来する。短絡を恐れずにいえば、前者は表面的、知的であり、主体的（対自的）でるが、後者は裏面的、情的であり、自明的（即自的）であるといえる。円了自身はどうであったか。

「研究報告」として、本稿は前掲の四期にわたって論述するべきであることは承知しているが、紙面が許さない。概説要旨ではあまりにも表面的記述に流れ、疑問を残したまま周知の事実の繰り返しになる。したがって紙面の許す限り、基本史料を出来るだけ提示し、傍証史料を援用しながら、第一期から詳述したい。

一　在郷時代（第一期）

一―一　漢学修業

作業仮説として、幼少時代は、広義の社会との関りにおいて受動的であるとの前提に立って、その間における円了の行動を概観する。この時期の社会と個人両者の動きは、円了の意志とは無関係であったとしても、その後の円了の行動に影響しないではおかない。

最初に、円了が受けた教育を検討する。教育は社会生活の始まりであり、必ずしも子供は積極的に参加するとは限らない。円了は「自伝」とか「回顧録」に対して否定的であった。「……さほどの人物にあらずして伝記を吹聴するは、恥ずかしきことなり。先ごろ書林の来たりて、余の伝記を記せられんことを請う。余、たちまちその属に応じて、／人以有伝為伝、余以無伝為伝／と書してこれに授く」『円了漫録』（六十二「余の伝記」）。したがって彼の幼年期の基本史料は少なく、断片的である。最も纏まっているのは『活仏教』付録　第一編「信仰告白に関して来歴の一端を述ぶ」（『哲学雑誌』十九巻十一号　大正元年十二月）であって、次のような回顧談が見られる。

◎父は真宗門下大谷派の寺院の住職たりしを以て余の春秋十歳までは宗門の教育を受けたりしが、会々戊辰の戦乱となり、王政維新となり、時勢一変したりし結果、余の教育の方針も一変し、仏典を抛ちて儒林に遊ぶに至り、石黒忠悳氏（男爵）の家塾にあること約二年、木村鈍叟氏（旧長岡藩儒者）の講義を聴くこと約四年、その間漢学を専修したりき（選四、p・四九五）。

つまり、十歳までは仏典による真宗大谷派の「宗門の教育」を受けたこと、ついで石黒忠悳の家塾で二年間、

木村鈍叟に四年間漢学を学んだことが語られている。十歳以後については『円了茶話』の「第三十六話　賞与」において、少し詳しく語られている。

◎余は郷里にある日、「五経」および『文選』の素読を石黒（忠悳）先生に受く。そのときは慶応三年より明治元年の間にして、余ときに齢十歳なり。……洋算も加減乗除より比例までは、その門にありて教授を受けたり。……翌年より長岡藩の老儒、木村鈍叟翁につき、経書の講義を聴くことを得たり。余が漢学の素養はこれのみ。（選二十四、p・一五二）

授業内容は二種の「履歴書」（明治八年・長岡高校蔵本、明治十八（ママ）年六月・『屈蠖詩集』本）によって、明らかである（資料編一―上　p・三～）。しかし、『屈蠖詩集』本は氏名の次に「明治十年十月／十八（ママ）年六月」あとある。これは東京での修学中に当たり、詩稿制作の年紀であろう。次に在郷中の学修暦の記述が続き、改行して「履歴書自明治元年／至四（ママ）年末」とあり、「漢書」、「英書」、「全部に渉ざる書」、「数学」の分類がある。しかし、読書歴は三類とも書名が列挙されているのみで、長岡高校蔵本と違って、年紀を欠くから年次的に確定することは出来ない。

◎履歴書

○自慶応二丙寅年至明治二己巳年［（1866～1869）円了九歳～十二歳］

漢書／読書／

合刻四書　孝経学記大学中庸　の四巻を合刻す　一冊／論語正文　山子点　一冊／孟子正文　三冊／周易正文二巻／毛詩正文　三巻／

尚書正文　二巻／礼記正文　五巻／文選正文　十二巻／

明治一の春より二年の春まで石黒先生より受業／
［『屈蠖詩集』は明治元年三月より同二年四月まで……］

○自明治二己巳年至同五壬申歳暮／［（1869～1872）円了十二歳～十五歳］
此四ヶ年の間業を木邨先生より受く／
［『屈蠖詩集』は明治二年八月より五年十二月迄……］

読書　国史　漢書／
三体詩　三巻／唐詩選　三巻／古文真宝　前書　一巻／古文真宝　後書　二巻／小学　二巻／日本外史　二十三巻／
聞講　漢書／
論語　四巻／孟子　四冊／春秋左氏伝　十五冊／古文孝経　一帙／大学　一書／中庸　全巻／詩経　三巻
会議　国史　漢書
蒙求　三巻／論語　四巻／孟子　四冊／国史略　五巻／史記　太史公司司馬遷著
質問　国史　漢書
日本外史　二十三巻／　［頼山陽文政二年］
正文軌範　七巻／続文章軌範　七巻／孔子家録　五巻／
日本政記　十六巻／　［頼山陽天保三年］
世説　十冊／荀子　十冊／春秋左氏伝　十五冊

独誦　国史　漢籍　訳書

春秋　一冊／和語要領　太宰純著　三冊／古事記　三冊／文筌　南郭先生著　一巻／東京土産　一巻／　［鈴木喜右衛門　明治4年］

万国新話　一巻／　［柳河春三　明治元年］

地球説略　米人「エリテツ」著　三冊／［御布令之訳　――・司馬江漢　嘉永七年］

博物新編　英医「ワシン」著　三冊／［英国医士　合信　小室誠一訳　三巻　明治九刊］

西洋事情　初編　福沢諭吉著　三巻／同　外編　三巻／同二編　四巻／［～明治二］

勧善訓蒙　箕作麟祥著　三巻　［訳述　泰西一　明治4年刊］

○明治六葵酉暦［（1873）円了十六歳］

独見　国籍　訳書

輿地誌略　内田正雄著　三月より五月迄　六巻目まで［明治三年刊　十一・十二巻は西村茂樹編述］

角毛偶語　西国僧淮水大顚子著　五月下旬　五冊［南渓恵空　天保五年］

世界国尽　福沢諭吉述　九月中　六冊　［明治二年刊］

万国新史　箕作氏著　九月中　二編まで　［――麟祥　～明治十年］

学問勧　福沢氏著　［明治五年初編刊］

洋書　五月二十九日より八月上旬まで高山楽群社入学栗原氏より受業

小語綴（スペリング）

読本（リードル）　「ヨニヲン」氏　六月七月の間　第一編　＊大半

小地理書　「コロネル」氏　七月下旬　一編　＊小半
第一読本　「サアゼント」氏　＊全
第二読本　同上

上記の＊の語は『屈蠖詩集』本により追加、［　］の著者・編者・訳者および刊行年は筆者の加筆であるが、未詳の点がある。

石黒の家塾では「漢書」のみの「読書」であるが、木村塾の条には「漢書」の「聞講」と「国史・漢書」の「読書」、「会議」、「質問」の各項目があり、「国史・漢籍・訳書」の「独誦」の項目がある。これらの項目は塾における伝統的授業形式であると思うが、筆者は未詳である。「独誦」の書籍は円了が自主的（薦められたものもあろうが）に読んだものであろう。

円了が受けた教育は形式的にも内容的にも転換期にあったのであるが、教師である石黒も木村も幕末儒学の伝統的教育を受けた人であり、その形式と内容を踏襲して教授したと想う。いま手元にある幾人かの人物の自叙伝によって例証して置きたい。

★西　周「自伝草稿」（『日本の名著』34）

天保十一年　庚子（一八四〇）　十二歳。この年より、山口慎斎先生［頭蔵と称す］に養老館において句読を受く。……おおよそこの年ごろ、五経を終え、『近思録』、『靖献遺言』、『求蒙』、『文選』、「左国史漢」（『春秋左氏伝』、『国語』、『史記』、『漢書』）におよびたり。しかしてはじめて詩を賦するは瓜生先生の授くるところなりと

す。

★石黒忠悳『懐旧九十年』（岩波文庫　以下同じ）

嘉永二年、五歳の時、父が招聘した儒者松井煥斎の著書『朱氏治家格言児訓』。嘉永三年、六歳、『大学』の素読。安政四年、十三歳、『文選』と唐韻、『論語』、『周易』、安政五年、十四歳、（この数年来、国史）『日本書記』、『国史略』、『日本外史』、『日本政記』、『新論』（勤皇の心を起こす）。総じて、十五・六歳の時の学力を「文学としては無論漢学のほかには何もないが、その力量は白文すなわち無点本をようやく読み解き得、また筆跡は楷書でもまた通俗書でも人並より少し上手であり、算術は四則、詩は折々」作った、と自らの学力を評している。

石黒は文久二年、十八歳の時、片貝村で家塾を開く。ここで、円了は学ぶのであるが、石黒は学生を「一般村民の子弟」と「医・僧または農家の子弟」を下級と上級との二組に分けて、下級にでは習字、読書、算数を教え、時には「歴史の講釈を入れ殊更勤皇思想を注ぎ込み」、上級では「四書・五経の素読、『小学』・『朱氏家訓』・『国史略』・『日本外史』・『政記』・『十八史略』・『元明史略』・『古文真宝』・『坤輿図誌』・『明倫和歌集』、それに算術・習字・剣道の型など」を教えている。ここで、円了の逸材振りが言及されていることは、よく知られている。

★福沢諭吉『福翁自伝』

一五・六歳の時、初めて田舎の塾に入る。外の者は詩経・書経を読むのに、自分は「孟子の素読」であったというから、福沢の塾の就学は遅れていた。「四・五年ばかり通学」して講義を受けた「漢書」は「詩経に書経」、「蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、荘子」、その後は「歴史は史記を始め、前後漢書、晋書、五代書、元明史略」を独習している。

★加太邦憲『自暦譜』

安政二年、隣町に住む藩の学頭である漢学者大塚桂の大塚塾で『唐詩選』、『三体詩』、安政四年、九歳の正月、藩校立教館に入学し、『小学』・四書、『童蒙訓』を学ぶ。写書としては、十一歳の時、『東国太平記』十八巻の内二巻、十二歳の時、『豊臣武鑑』、十三歳の時、『家忠日記』、一四・五歳、『三河後風土記』四十九巻の内十一巻などがある。加太は「十六歳までの間は、日々立教館と大塚塾とにおいて勉強したり」と言っているから、九歳から十六歳の七年間、藩校と私塾の両方に通っている。藩の制度として、十歳の冬までに四書素読を終った者には『孔子行状図解』一部、十四歳の冬までに五経の素読を終った者には『孝経大義』一部を賞することがあり、加太は十歳で四書、十二歳で五経を終っていたので、両方の賞を受けている。

★植木枝盛「植木枝盛自叙伝」

植木は安政四年生まれであるから、円了と同世代人である。「十歳に及び始めて習字師島崎忠輔先生の門に出入し筆書」を学び、「習字は十四歳の終りに至りてこれを廃し」た。十一歳になり文武館に通学して、まず「句読席」で「四書五経の句読」を始め、次に「独看席」で「経史の講究」を行い、十五歳で、高知県の公費を受けて致道館に入塾、漢学と共に翻訳書を読む。家永三郎の解説では『輿地誌略』、『西洋事情』を読んだとある。

円了十歳前の仏典学習については不詳であるが、恐らく宗門の常用教典や親鸞の和讃・蓮如の御文の読誦であったのではなかろうか。円了より七歳年上（嘉永四年生）の村上専精は「極貧の寺」に生まれたが、父から「浄土三部経」の読み方を仕込まれた。八歳の時、ほかの寺に預けられ、ただ農作業に使われるばかりで学問の機会はなかったが、「なかには漢文の素読を授けてくれる住職がいて、専精は午前中に習うと、午後は五十回繰り返し読んで暗記」した。十八歳のころ学問を決意し、姫路の真宗本願寺派・結城義導師の漢学塾に入門し、三年あ

まりの間に『論語』・『孟子』・『蒙求』・『十八史略』などを学んでいる（田村晃祐『わが思索の道　近代日本仏教者たち』上　NHK　平成15・10・p・98）。専精の場合は家庭の事情により年齢的に遅れているが、寺の子弟の漢詩・漢学修業は当時の常識であった。以上の例から判断すれば、円了の漢学入門は、年齢的にも内容的にも、寺院や武家の子弟に作詩と漢学を教える当時の一般的慣習に従っていると云ってよい。

石黒は、自分の私塾について「『国史略』・『坤輿図誌』・『明倫和歌集』・算術などは他の塾には見られぬところであったのです」と云っているが、『屈蠖詩集』本の「履歴書・読書録」には『国史略』が掲載されているのみで、「算学」は「自明治七年五月同八年末まで長岡校に於て教授を経し分」として掲載されているので、石黒（師の象山は「詳証術は万学の基本」と数学を重視した）が自ら誇りとした塾の斬新を円了は自覚しているとはいえない。

一―二　「釈円了字襲常」の自署

「履歴書・読書録」の「自明治二己巳年至同五壬申歳暮」の部分に見られる「独誦　国史　漢籍　訳書」の項に列挙されている文献は円了が自主的に読んだものであるから、これを手掛りに木村の塾風と円了の心境を推測してみたい。幸い、円了の最初の詩集が円了の母校である新潟県立長岡高等学校の校史資料室に展示されていて、長谷川潤治の論考「『襲常詩稿』初探」（『井上円了研究』7　円了センター　1997、同「長岡高等学校所蔵井上円了関係資料」）（『井上円了センター年報』八　1999　p・201～211）がある。長谷川氏は「本文　巻初一丁」、「裏表紙見返し」の写真を示している。本文巻初は「襲常詩稿　釈円了字襲常」とある。裏表紙見返しは「明治五歳在／壬申／井上襲常／齢在十五歳」とあり、長谷川氏によると、裏表紙には「大岩山釈円了」とある。この

年は円了が木村塾にいた最後の年に当たる。先の引用文に続けて、円了は「明治六年より英学に転じ、同じく七年より十年まで長岡洋学校にありて教授を受け、あわせて教鞭をとりたり。余が長岡にある間、父は余をして将来住職を継がしめんと欲し、余に謀るに得度式を本山に請願せんことをもってせり。余の意これを好まざるをみて、ひそかに願書を呈出して許を得、のちに余にその由を告げ、いわゆる事後承諾をもとめられたり。故に余の僧籍に入りたるは自ら意識せざりしせざりしところなり」（選四・p・495～496）と述べているが、この記述は回顧談であるから止むを得ないとしても、『襲常詩稿』の「釈円了」の自署と矛盾している。この詩稿を装綴した時、円了は仏弟子である自己を明確に自覚して「釈円了」と書き込んだことであろう。ちなみに、円了の得度は明治四年四月二日（『百年史』年表・索引編、p・8その他）、長岡に出る二年前である。その後、円了はこの釈名を生涯使用しているのである。円了の名を世間に知らしめた『仏教活論　序論』にも、これと同様の回顧談がある。本書は明治二十年二月初版であるが、大学を卒業した明治十八年時の回想である。よく知られている文言であるが、確認のため引用する。「余はもと仏家に生まれ、仏門に長ぜしをしをもって、維新以前は全く仏教の教育を受けたりといえども、余が心ひそかに仏教の真理にあらざるを知り、顧を円にし珠を手にして世人と相対するは一身の恥辱と思い、日夜早くその門を去りて世間に出でしことを渇望してやまざりしが、たまたま大政維新に際し一大変動を宗教の上に与え、廃仏毀釈の論ようやく実際に行わるるを見るに及んで、たちまち僧衣を脱して学を世間に求む。初めに儒学を修めて……」（選三p・336）。その後段は「儒をすてて洋に帰す、ときに明治六年なり」とあり、仏教改良の決意で終っている。この文言は明治十八年の意識の投影であって、明治五年の円了は「僧衣を脱」せず、極めて素直に仏儒を兼学している。

一―三　木村塾

新潟県では、藩校は高田藩の修道館と長岡藩の崇徳館が知られているが、私塾としては、石黒忠悳が私塾を開く前に助教を務めた片貝村の村塾・耕読館（前身は安永八年設立の朝陽館）が知られている。この塾は土地の庄屋、医師、僧侶によって設立され、第二代藍沢北溟の時に有名となり、六代を重ねて明治期まで存続したという。江戸期には私塾九十二の他に寺子屋が七九八あり、中・高教育を私塾が、初等教育を寺子屋が受け持った。県民の意識は、生業が農業中心であったので、現実的であり、学問は合理的な考証を基礎とする折衷学であった。このことを物語る例として、藍沢北溟の子・藍沢南城（1792～1860）は私塾・三余堂を設立しているが、塾名の「三余」は「歳に余りの冬、日の余りの夜、時の余りの雨」を意味し、この「三余」を学問に当てるというものであった（『季刊　情報文化』05、Summer・藍沢南城については「長谷川論文」注8）。なお、石黒は家塾を開いたころ、友人と「越後巡回」を行い、各地に藩校以外の私塾に就いて記録している。つまり「狩羽郡南城に藍沢南城、同柏崎には原修斎、三島郡入軽井には遠藤軍平、小今川には青柳剛斎、蒲原郡粟生津には鈴木文台の諸氏がありました」（『懐旧九十年』）。

「慈光庠」の設立について、長谷川氏は、藍沢南城の『三餘集抄』巻二に拠り、「神谷の庄屋を頼って来た木村に、慈光寺門前に住居を周旋し、開塾を勧めたのが高橋家であったようだ」とし、『神谷略誌』の記述を紹介している。これによると、明治四年、「浦、道半、宮川外新田、中沢新田、飯島」地区の有志が協議し、木村を招聘して浦村の慈光寺に塾を開いた。木村は本名誠一郎、藩校崇徳館の都講であった（「長谷川論文」注23）。崇徳館は文化五年の創立で初代都講は伊藤仁斎の孫東所の第五子東岸、同十二年、古学派の秋山景山が都講となり、

天保七年、朱子学派の高野松陰が都講を代っている（長岡市近世年表）。高野松陰は天保二年、長岡藩の留学生として、江戸の佐藤一斎に入門し、塾頭になっている。佐久間象山、山田方谷は同門の後輩である。また一緒に山田到処と木村竹軒が江戸に留学しているが、木村竹軒は名を誠一郎と云い、朝川善庵（１７８１～１８４９）の下で学んでいる（『長岡中学読本』Ｐ・43）。朝川善庵は藍沢北溟が師事した片山兼山（１７３０～１７８２）の子息で、医家の朝川黙斎の養子となった人である。また、片山兼山は藍沢南城の師松下一斎の師でもあるから、北溟は同輩にわが子の教育を托したのである（「藍沢南城年譜」）。片山兼山は折衷学派の祖といわれる儒者であるから、木村誠一郎（鈍叟・竹軒）もその流れを汲む儒者であったといえる。都講は藩政の理念に関して中心となる学者であるから、木村の学識は推して知るべし、である。

長谷川氏は「襲常詩稿」の内容を分類され、「〈慈光庠〉に関する詩が五首、〈高山洋校〉に関する詩が一首」認められ、円了はこれを「「慈光黌」、「浦村庠」あるいは単に「学校」と呼んでいる」という。更に、この「慈光庠」は円了の生家慈光寺と推定し、その根拠として連詩「慈黌雑吟」二首を掲げている。円了の修学の感慨が溢れているので、長谷川氏に従って、次に引用する。（傍線は筆者）

浦里開黌集小児　浦里　黌を開けば小児集う
読書終日勤孜々　書を読むこと終日　勤め孜々たり
午前共誦支那語　午前　共に支那語を誦し
午後相伝英米詞　午後には相伝う英米の詞
新施罰刑懲惰慢　新たに罰刑を施し　惰慢なるを懲し

常窮道理教愚痴　常に道理を窮めて愚痴なるに教う
早成内外国家学　早に内外国家の学を成し
要立文明開化基　文明開化の基を立てんことを要(もと)む　〈其一〉

群児共学慈光黌　群児共に学ぶ　慈光黌
二十有余五六名　二十有余五六名
日日慶公与徳子　日々　慶公と徳子と
使能頑魯趣文明　能く頑魯をして文明に趣かしむ　〈其二〉

円了少年は新しい時代転換の気風に包まれると共に道徳をわきまえ、東洋と西洋の学を修めつつ、新時代に向う情念に溢れているようである。塾の仲間は二五・六人とまとまりが良い。「慶公と徳子」は「慶太郎・徳太郎」の両先生（「長谷川論文」）である。塾長格の木村を初め教員の経歴と塾の教員構成は不明であるが、時代の変化に対して敏感な先生であったようである。

明治五年八月三日、文部省布達第13・14により学制が公布された。これは円了が慈光庠で学んでいた時期と重なっている。円了は十五歳であるから、「下等中学」の年齢に当たる。また「家塾」が公的に認められていて、その定義は下記の第三十章の条文の通りである。

下等中学ハ十四歳ヨリ十六歳マテ上等中学ハ十七歳ヨリ十九歳マテニ卒業セシムルヲ法則トス

第三十章　当今中学ノ書器未タ備ラス此際在来ノ書ニヨリテ之ヲ教ルモノ或ハ学業ノ順序ヲ蹈マスシテ洋語ヲ教ヘ又ハ医術ヲ教ルモノ通シテ変則中学ト称スヘシ但私宅ニ於テ教ルモノハ之ヲ家塾トス

教室で使用する教科書は教則に定められた「標準教科書」であるが、制定当初としては、すべてを備えることは無理だったので「洋学」を含めて、この教科書を使用しない中学は「変則中学」として認められている。「家塾」についても同様である。恐らく、慈光庠の二人の先生は時代の思想と教育動向に注意を払っていたであろうから、「標準教科書」のことは知っていたであろう。筑波大学の展示会「小学教則の標準教科書」には円了の「独誦」にある『西洋事情』（上等小学読本輪読標準教科書）、『勧善訓蒙』（下等小学六級修身口授標準教科書）、『博物新編』（『博物新編訳解』とあるが、上等小学博物輪講標準教科書）がみられる。以上の傍証から「独誦」の文献は円了が主体的に選書したものではなく慈光庠の先生など先輩より薦められた近刊の書であったと想う。ちなみに、明治六年改正学制の「学校系統図」（文部省『学制百年史』資料編）によると、年齢的には次の通りである。

◆尋常小学・下等小学は六歳～十歳、上等小学は十歳～十四歳（十・五歳～一三・五歳）。

「小学私塾、貧乏小学、村落小学、女児小学は七歳～十一歳」

◆中学・下等中学は十四歳～十七歳、上等中学は十七歳～二十歳。

◆外国教師にて教授する中学・予科は十四歳～十五歳、中学は十五歳～十八歳と十五歳～二十一歳の二コース。

しかし、周知の通り、当時の政府は「支配し援助せず」で、小学校は既成の施設や寺院を利用したから、小学校を新設することは地域にとって大変困難なことであった。例えば小千谷小学校の場合、地元の縮緬商の山本徳

右衛門が戊辰戦役の遺児を救済するために学校を造る資金として五年間に千両を提供する、という建白書を出している（前掲「季刊　情報文化」）。

一―四　洋学修業

下記の通り、明治六年（1873）円了十六歳）の条では、読書暦は「独見」と「洋書」との二項のみである。「独見」の項の国籍と訳書の文献は、道徳書である『角毛偶語』を除いて、当時の新思想を代表する人物の著書であり、「洋書」はすべて英語のテキストである。慈光庠でも「独誦」の項に同類の著書・訳書が見られるが、ここでは、漢学から完全に離れている。「洋書」の項に「五月二十九日より八月上旬まで高山楽群社入学栗原氏より受業」と注記されているが、高山楽群社で学んだのは僅か三ヵ月に満たない。この故か、円了は『屈蠖詩集』本履歴では触れていない。残念ながら高山楽群社とその教師・栗原については不明である。問題は洋学の学修は時代の趨勢であったが、漢学から洋学への転換が円了自身の決断であるのか、否か、である。この点の考察を続けよう。その後の読書歴は以下の通り。

○明治六葵酉暦［（1873）円了十六歳］

独見	国籍	訳書		
輿地誌略	内田正雄著	三月より五月迄	六巻目まで	［明治三年刊］
角毛偶語	西国僧淮水大顚子著	五月下旬	五冊	［南渓恵空　天保五年］
世界国尽	福沢諭吉述	九月中	六冊	［明治二年刊］

万国新史　箕作氏著　九月中　二編まで　［箕作麟祥　～明治十年］
学問勧　福沢氏著　［明治五年初編刊］
洋書　五月二十九日より八月上旬まで高山楽群社入学栗原氏より受業
小語綴（スペリング）
読本（リードル）　「ヨニヲン」氏　六月七月の間　第一編　＊大半
小地理書　「コロネル」氏　七月下旬　一編　＊小半
第一読本　「サアゼント」氏　＊全
第二読本　同上
以下＊の語は「履歴書・読書録」により追加

○明治七甲戌暦　（1874）　円了十七歳
独見　国籍　訳書
新律綱領　二月
改定律例　二月
新　論　会沢先生著　二月上旬　上下二巻
童蒙教草　福沢諭吉著　二月中　三巻　［明治五年刊］
台湾記聞　長崎満川成種纂述　二月中旬　一冊
自由之理　中村敬太郎訳　二月中旬末　六冊　［J・S・ミル　明治五年］

西洋夜話	寧静著	二月中下旬	五集まで	［寧静学人　明治四～六年］
西洋衣食住	片山淳之助著	二月下旬下	一巻	［慶応三年刊］
啓蒙知恵環	於菟子訳述	二月下浣中	三巻	［明治五年］
五州記事～六年］	寺内章明訳編	二月下旬	二冊まで	［グードリッジ『万国史』などによる。明治四
万国奇談	青木輔清著	二月下旬	上下二巻	［明治六年　一名・世界七不思議］
西洋史記			十冊まで	［駝懦屢原撰　明治三年］
史略		二月下旬の末	四冊	
道理図解	信濃田中大介纂緝	三月上旬の初	三冊	［天然人造一　明治二年］
西洋新書	瓜生政和編集	三月上旬	二巻	［六編十二冊　明治五～八年・西洋見聞図解　二冊 明治六年］
同　二編	瓜生政和著	三月中旬初	二巻	［　同上　］
同　三編	同上	三月中旬末	二巻	［　同上　］
同　四編	同上	四月上旬	二巻	［　同上　］
世界風俗往来		三月中旬	一巻	
万国往来		同　中旬	一巻	［吉野屋甚助　明治四年］
東洋史略	岡田輔年著	三月四月の際	上下	［大日本国尽　明治五年あり］
窮理図解	福沢諭吉著	三月	三冊	［訓蒙―、明治元年刊］

窮理問答　後藤達三著　［―訳述　明治五年］

洋書　五月五日より長岡洋校に入学して洋籍を学べり

［『屈蠖詩集』は明治七年五月より九年七月迄新潟学校第一分校に於いて英学并洋算を脩む……］

万国史　「パーレー」氏　米版　＊全［円了茶話］

大地理書　米人「ミッチェル」氏　＊全

小米国史　「クイケンブス」氏　○米人　＊全［円了茶話］

大米国史　同　氏　＊全

究理書　同　氏

文典　「ピネヲ」氏　＊全

英国史　「マルカム」氏　＊前編

仏国史　「グードリッチ」氏　＊前編

羅馬史　同　氏　＊後半

○明治八乙亥暦　（1875）円了十八歳

独見　国書　漢書　訳書

元明史略　○四月中　四冊

老子経　○七月　上下二冊

東京新繁昌記　二編まで　［服部撫松著　明治七年］

近世史略　三冊　［椒山野史　明治五年］
立志編　中村敬太郎　○三四月　［西国立志編　マイルズ・明治四年］
国法汎論　○十月の頃　［ブルンチュリー　加藤弘之訳　明治五年］
近世紀聞　三十六冊　［染崎延房編　嘉永六～明治二年］
弁妄和解　安井息軒先生著　○七月　一冊［明治七年一月刊］
性理略論解　米人丁韙良（マルチン）著／嘉魯日耳士訳　上下二冊
英氏経済論　小幡篤次郎訳　○九月前後　三冊

洋書受業之部

ヒシカルジョグラヒー　米版「ウーレン」　○二月一日より　＊全
万国史　「ウエルソン」氏　○二月中旬より　＊全［円了茶話］
経済書　英版「チヤンブル」氏　○四月二十九日より　＊全
大経済書　米人「ウエランド」氏　○六月中旬より　＊三分の二
日耳曼史　「マルカム」氏　○七月下旬より　＊全
究理書　「ウェルス」氏　○十一月九日より　＊全

洋書独見之部

羅馬史　「スウェス」氏　○八月　＊前半
算学　――　省略

円了は「明治七年六月、郷里長岡洋校に入り、はじめて英学を学ぶ。その教授法は変則中の変則にして、文法も聴かず、リーダーも読まず、最初に学びたるものはパーレーの『万国史』にして、そのつぎはクワッケンブスの『米国史』なり。これを二年未満にして卒業し、ただちに授業生となりて、教鞭を執るに至れり。ゆえに、余が英語の素養は漢学より一層浅し」、と回想している（『円了茶話』三十七話「洋学」選二十四・p・152～153）。この間における円了の思想は『詩冊』によって窺い知ることができる（長谷川潤治「丸上円了の原風景を読む―稿本『詩冊』を中心に―」『東洋大学中国哲学文学科紀要』第十二号・二〇〇四年所収）。

本題から離れるが、先に、円了の記憶と事実関係を検討しておく。「長岡洋学校」は上記履歴書にも明治七年五月五日入学したことになっている。『屈蠖詩集』本では「新潟学校第一分校」となっている。円了はむかし懐かしい学校名を書いているのであろうが、明治四年の廃藩置県と明治五年の学制公布は全国の教育体制を揺るがす大変革であって、十五歳の円了にも忘れることの出来ない社会変化であったであろう。特に、円了が人間関係及び文化的にも直接影響を受けた長岡藩は廃藩の憂き目に遭っている。円了が京都へ出るまで在籍した学校は正式には「長岡学校」であり、その渕源は小林虎三郎・三島億二郎が協力して設立した「国漢学校」である。明治二年五月一日、戊辰戦争で焦土と化した長岡城下四郎丸村の昌福寺の本堂を仮校舎として開校し、翌年六月十五日には新校舎が完成した。この学校は身分の差なく総ての者を入学させ、国学・漢学のみならず、洋学局、医学局、演武場などの施設を備え、洋学・窮理・地誌・医学を教えた。明治二年八月二十五日長岡藩は廃藩となり柏崎県に入り、明治四年五月、国漢学校は分校長岡小学校となって、その名は消えた。この小学校は明治五年の学制公布により公立二十番小学校と改まり、現在阪之上小学校として存続している、という（長岡ミニ歴史館）。長岡洋学校は国漢学校の理念を再興するため、明治五年十一月、三島億二郎によって開校されたが、柏崎県と新潟

県との合併（明治六年六月十日）に伴い、明治六年十一月、今度は新潟学校第一分校となったのである。従って、円了が明治七年五月五日に入学したのは正式には、「新潟学校第一分校」である。「新潟第一分校」は明治九年十二月一日の開校式を以って「長岡学校」となる。円了は「授業生」として開校式で祝詞を述べている。校長は三島億二郎であった。当然、彼も開校式で祝詞を述べている。この開校式に関する資料「長岡学校開業一条」は既に復刻されている（『円了研究』7）。この資料は水島敏氏が円了センターに提供された「円了の自筆覚書」である（『同前』・p・169）。これによると、長岡学校は「柏崎県所轄のときより、鳥居南部石川等の勤力により旧領主牧野家の助力を以て、夙に資本を集め学生を募り旧藩人藤野善蔵を慶応義塾より雇ひ新たに洋学校を該地に排立す。その後筏多く変革ありと雖も、連続して以て今日に至るや県庁の盛励により諸彦の勤労を以て三大区合併協議し資本若干の上更に若干の金を増加し、学則を変し学規を改め、変則中学を開き和漢洋の三学を研究せしむ。九年十二月一日を以て開校式を行ふ」（『同前』・p・161）、とその歴史の一端が解る。校長三島は学問の個人・国家にとっての必要性と開学に至る経過を述べてから「億二郎不肖兼て之を校長に承け末席に列なるの栄を得。豈一言せざるべけんや。此の校僅かに変則中学を以て開くと雖も、今を以て将来を察するに、学区内の諸員更に奮発漸く其規模を拡大にするの期あらんことは我輩の信ずる所にして」と注文し、ここに学生の勉学、自立、自制を確信し「他日邦家隆興の元素をなすものあらんとする、亦我輩の深く信ずる所なり」、と所信を述べている（『同前』、p・163）。事務掛の秋野兵太郎は「独我北越に於いては未だ中学の設けあらず、以て遺憾と為せり。仍今三大区合併協戮し官に乞い、旧洋校を変じて変則中学となし以て北越の先鞭を著け更に学事を拡張せんとす。某菲材なれども旧校創業以来事務に尽力し未だ嘗て其志を屈せず多年盤錯万艱を貫て此に至り復事務の職を奉じて今日の盛事に預る、曷の欣抃に堪えん」、と長岡洋学校創業以来の苦労を感慨深く述べている。また、もう一人の

事務掛の大橋佐平も「嚮に佐平乱後此地に小学と洋学両校なきを慨し大に有志を誘倡して之を興設せり。当時之が為に讒嫉を受け、険艱言ふべからざるものあり。然れども佐平百折しして橈まず、遂に其志を貫く。猶万軍の重囲を破って一条の四路を開くに異ならず、爾来此に振作すること多年、今復三大区合体協力此中学を興立し、太いに学化を振張せんとす」、と設立当時の苦労を回顧しながらも初志貫徹を喜んでいる（『同前』、p・165）。また、漢学教官で円了が「漢学を田中春回師に謀る」と言っている先輩教師も祝詞を述べている（『同前』、p・164）。最後に、円了の祝詞は、前半に円了の思想が見られ、後半は普通の祝詞を連ねているに過ぎない。「方今大政維し、新に文学日に進み都鄙大中小の庠校を設置し、土民に和漢洋の文学を講習す。其設る教えは密にして且至れりと謂べし。夫れ文学なる者は開智の法にして、而も富国の基也。国家の盛衰も亦其隆替に関す。在昔我邦の文教は未だ洽からず、学術は未だ精からざる故に、民智開かざれば国勢振るわず。今や国に大学あり、県に中学あり、区に小学ありて、以て民材を育し、人智を開き、国勢を張らんと欲す。朝旨の深くして且遠き、奉戴せべけんや。我県庁専ら文芸を好み、深く学術を愛し……［後段省略、原文漢文、送りカナ付き］」（『同前』、p・168）。煩を厭わず「長岡学校開業一条」の祝詞を紹介したのは、戊辰戦争後の長岡における全住民の教育への意欲と学校設立の苦労、郷土の復興政策を教育に置いたこと、その住民の学校が行政の都合で振り回されたことを見たかったからである。これが円了の哲学館設立に影響を与えずには置かなかったであろう。更に想像を許して頂ければ、佐久間象山の存在である。周知の通り、象山は嘉永四年六月、江戸木挽町に砲術・儒学の塾を開いているが、この塾で西村茂樹、加藤弘之、小林虎三郎、三島億二郎が学んでいる。西村茂樹は象山の勧めに応じて蘭学を始めた、という（『日本道徳論』岩波文庫　解説）。加藤弘之は嘉永五年、十七歳の時、象山の塾に入門している。僅か一年ばかりの修学であったが、その印象と敬愛の念は深かった。「維新後なお健全ならしめしならば、その才

略を顕わすもの、また非常なりしならん」、とその横死を惜しみ、その見識を藤田東湖や横井小楠に勝り、豪胆さは西郷隆盛に匹敵する、と評している（『経歴談』）。小林虎二郎については、象山自身が「門人の長岡藩士」と呼び（『省ケン録』）、子息格二郎の教育を託すほど信頼していた（「求志洞遺稿」小林虎二郎　長岡市立中央図書館）。石黒忠悳も強く象山を敬い、松代に蟄居中の象山を訪ねて教えを受けたことは『懐旧九十年』に詳しい。更に、象山の妻は勝海舟の妹・順であり、象山は順への手紙で「兄」と呼んでいる（『公武一和』）。また、これらの人物との関りは、その後の円了の思想と行動に、直接・間接に、大きな影響を与えたに違いない。

象山の言葉・「東洋の道徳、西洋の芸術（技術）」はあまりにも有名であるが、「上書稿　幕府へ幕政改革批判」（『公武一和』「日本の名著」30・松浦玲　現代語訳による）に象山の仏教改革説が述べられている。象山は国力強化策の第一に「遊民が多く、せっかくの財貨を無駄に消費している」点の改革を挙げている。一、今日、仏教寺院・僧侶はあまりにも多く、彼らの徒食・消費は国家の損失である。二、仏教は永年の病患であるが、過激な改革は危険である。三、儒礼による葬式の免許、得度の許可制による僧侶数の削減。四、僧侶の道徳と学識の向上。この四点を提案し、しかし「その説くところは列子に似ており、列子の説は西洋実測の学理に合致するところがあります。この関係は人間の本質が古今東西を通じて変わらないことを現わしており、いかにもおもしろいところでありましょう。このように仏教がまったくの無益でないとあれば、その書物をやくべきではありませんし、また僧侶も、世のため人のために役立つのであればすこしは残しておくほうがよろしいかと思われます」、と仏教教理の合理性を指摘し、「仏教がいまのようにはびこっているのは一にはキリシタン邪宗門を防ぐために仏寺を利用したため」である、と幕府の宗教政策を批判している。象山の仏教改良法は、後年の円了の改良法と一脈通じるものがある。特に僧侶の道徳と学識の向上は、目的は違うが、護国の理念において一致している。仏教観に

関しては、「西洋実測の学理に合致する」という合理性、「古今東西を通じて変わらない」「人間の本質」の指摘は、一面、円了の仏教観に通じる。こうした象山の思想を、時に触れ、円了は先輩諸氏からも聞かされたことであろう。

以上、郷里における円了の学修は、漢学の伝統的形式、洋学の時代性、僧侶たる宿命性と、すべて受動的（即自的）要素を形成したものといえる。特に、信仰に関しては生涯変わらぬ安心立命の安養の世界（真宗の教え）に生きていた。次に円了の信仰について考察しておく。円了が自己の信仰を直接語っているのは、次の三つの文言である。

◎「父井上円悟宛書簡」明治二十二年八月二十八日（資料編一―上、p・51～p52）

……何分天下ニ仏教将ニ死ナントスル際ナレバ私モ、朝夕心痛ノミ罷在候。夜分モ十分眠リ不申候。其心中ノ心配ハ山ノ如ク海ノ如クニ候。併シ私ハ今世ハ苦界ナルコトヲ承知仕リ居候。極楽ハ此世ニハ無之候。此世ニテ苦心スルハ此世ノ当然ニ候。此世ニ苦アレバトテ不平ヲ起スコト無之候。仏ハ西方ノ浄土ヲ説キタルハ此世ハ苦界ナルユヘニ候。此理ハ何経ニテモ一二枚熟読アレバ明カニ分ルコトニ御座候。今更怪ムニハ不及候。若シ此世ヲ苦界トシテ仏書ヲ一読スレハ、其理活キルカ如クニ心中ニ感スルコトニ候。若シ之ヲ安楽世界トシテ一読スルトキハ仏教ヲ信スルコト不出来候。迷（ママ）暗ノ別モ此事ニミニ候。私ハ飽マテ此世界ハ苦界ナルコトヲ信シ候。老少不定モ盛者必衰モ無疑実事ニ候。夫故私ハ生涯苦労スル決心ニ御座候。依テ若シ御老衰ノ御感覚モ被為（なされ）有候ハ、和讃ニテモ御文ニテモ時々御耽読アレハ、其理ハ忽チニ相分リ、宿縁ノアル所、来界ニアルコト等鏡ヲ見ルカ如ク相分リ可申候。一タヒ此世ヲ苦界トシテ来世ノ安養界ヲ信スルコト相出来候ヘハ、其心ハ却テ安心ト可相成候。此事御熟考被成下度（なされたく）万望ニ候。……

◎『活仏教』付録　第一編「信仰告白に関して来歴の一端を述ぶ」（『哲学雑誌』十九巻十一号　大正元年十二月　選四　p・496）

……これにおいて最初無意識に受けたりし得度は、自然に本山に委託返上したる姿になり、身は全く俗物と化し去れり。しかれども余は宗教的信仰は依然として真宗を奉じ、終始を一貫して替えることなし。いかに公平に諸宗教諸宗派を審判してみても、信仰の一段に至りては、真宗の外にいまだ余が意に適するものを発見せず。これ十歳以前家庭において受けたる教育の仏縁が、内より自発せしによるならんか。ああ快哉南無阿弥陀仏。

◎「哲学上に於ける余の使命」（『東洋哲学』第二十六編第二号、大正八年二月、『哲学堂』p・58）

終りに余の信仰に就いて一言して置きたい。其信仰を自白すれば、表面には哲学宗を信じ、裏面には真宗を信ずるものである。人或は信仰に二途あるべからずというであろうも、余は信仰其物にも表裏両面があると思ふ。已に我心に知情両面あるが如く、信仰にもやはり此両面が出来るようになる。之と同時に其体は一つであるから、哲学宗の立て方を裏面より眺むれば忽ち真宗となりて現はれて来る。もとより真宗に限るという訳ではない。……其中余は生来の因縁により、幼時に信仰の根柢を真宗の地盤に植付けてあるから、我心眼の前に真宗となって現はるゝのである。……

円了は早くから心理学の研究に専念し、教師としての最初の講義録は『通信教授　心理学』（選九所収）であり、明治十九年一月五日、通信講学会心理学講師に就任したことを「教育時論　26」は報じている。通信講学会は明治十八年十二月、湯本武比古など「教育時論」の関係者によって教育学、心理学、倫理学、論理学、経済学、生

物学、数理などの学科を学校教員や修学の志ある者に教授するために設立された通信教育機関である（通史編1 p・54）。既に円了の学識は高く評価されていたのであろう。仏教学者村上専精は唯識論を研究している時、西洋の心理学について、南條文雄に質問したところ、円了を紹介されたので、手紙で連絡をとったところ、円了に「通信講義録」を指示されたので、これを購読したこと、またベノインの心理学の翻訳書を同時に示めされたことを回顧している（三輪政一編『井上円了先生』東洋大学校友会　大正八年五十五頁）。同時に円了は妖怪の科学的考察に心理学を応用していた。当然、自己の心理分析も的確であったであろう。しかし父円悟宛の手紙は個人的私信であるだけに、本音が吐露されている。これは論理を超えた情念表出である。「生来の因縁」という宿命を語り、「幼時の信仰の根柢」という潜在意識を語っている。円了の阿弥陀信仰は終生変わることはなかった。

同時に、このような思想・教育境涯の中に漂っていたとしても、円了の意識の根柢には終生尽きることが無い貴重な鉱脈が蓄積されていた。それは漢学による伝統的な素養である。新しい思想や概念を表す「ことば」を文章化する場合、これを伝統的な「ことば」の中に見つけ出さなければならなかった。それには伝統的な教養が必要である。これが、後に円了が東京大学で西洋哲学を研究する時に発揮された。これは明治初期の啓蒙家を筆頭にすべての洋学者に言えることである。このことを如実に示す例は、「明治の初年に於ける法政学者が、始めて法政の学語を作った苦心も、亦た一通りではなかった、就中泰西法学の輸入及び法政学語の翻訳鋳造に付ては、吾人は津田真道、西周、加藤弘之、箕作麟祥の四先生に負う所が最も多い」、という穂積陳重の文言である（『法窓夜話』有斐閣　大正五年）。さらに時代を遡れば、哲学用語の統一を目指した井上哲次郎が和田垣謙三、国府寺新作、有賀長雄の協力を得て、弗列冥（フレミング）の『哲学字典』に基づいて編纂した『哲学字彙』（明治十四

年四月、東京大学三学部印行）である。井上の緒言によると、先輩諸師の妥当な訳語は総て採り、その上『佩文韻府』、『淵鑑類函』、『五車韻瑞』などの韻書、仏・儒書を参照して訳語を決めた、と言っている。『哲学字彙』は「按」として「註記」がみられるが、この注記では荘子、列子、墨子、楊子、老子、易繫辞、淮南原道、中庸、伝習録、近思録などの漢籍、法華経、円覚経、般若心経、法華玄義、倶舎論、起信論、名義集などの仏教経論が参照されている。易繫辞は六辞語の注記で参照されている。また、周知のことであるが、中江兆民はこのことを痛感していた一人である。彼は三十二歳の明治十二年岡松甕谷の紹成院、高谷竜樹の済美黌で漢学を学んでいる。そうして明治十五年、漢訳『民約訳解』の連載を始めている。明治十九年六月に著した哲学概論、『理学鉤玄』の「凡例」では、かつて漢学塾で修学したにもかかわらず、「一　理学家習用の辞語意義極て幽眇にして之を訳すること甚だ難し。博く経子語録及び仏典の類を蒐討するときは定て相合する者有る可し。独奈せん著者少小より力を西学に専にして、未だ広く群書に及ぶこと能わざるを以て訳語往々強捏鄙陋を免れず。……」、と漢籍による伝統的教養の重要性を指摘している。この重要性は思想・哲学に限らず、文学書にまで及んでいる。森田思軒の翻訳を褒めて「漢学、洋学を兼ねそなえ、とくに漢学の素養のある者はこの人一人であった」、と偲んでいる（『一年有半』）。このことは兆民の弟子幸徳秋水に伝えられ、「先生予らに誨えて曰く、『日本の文字は漢字にあらずや、日本の文字は漢文崩しにあらずや、漢字を用ゆるの法を解せずして、よく文を作ることを得んや、真に文に長ぜんとする者、多く漢文を読まざるべからず。かつ世間洋書を訳する者、適当の熟語なきに苦しみ、妄りに疎卒の文字を製して紙上に相踵ぐ、拙悪見るに堪えざるのみならず、実に読んで解するを得ざらしむ。これ実は適当の熟語なきにあらずして、彼らの素養足らざるに坐するのみ、思わざるべけんや』と」（河野謙三『日本の名著』36、解説）、と言わしめている。この点の心配は円了には無かった。

以上のように、郷里における円了の学修を見てくると、復興の意欲の燃える郷土の片田舎にあって、思想・教育の境涯を素直に受け止めている円了の姿を想像することが出来る。寺の長男として生まれたのが因縁ならば、石黒忠悳が片貝村に私塾を開いたのも因縁であり、石黒塾に入塾したのも因縁である。その後の木村塾、高山楽群社の閉鎖、長岡藩の廃藩と学制公布による長岡学校の開校、すべては円了の手の届かぬ世界の出来事であった。三島億二郎が慶応義塾より藤野善蔵を招聘して長岡洋学校を設立した、その郷土愛と壮挙を少年円了はどの様な気持ちで聞いたことであろうか。藤野善蔵（弘化四―明治十八）は北越戊辰戦争中は江戸で、小林虎三郎の末弟小林雄七郎と江戸で英学の修業を続け、明治二年には小林雄七郎・城泉太郎と共に福沢塾へ入り、明治七・八年ころ塾長になっているから、長岡洋学校に居た年月は短いが、福沢の思想を長岡に植え付けた一人であった。なお城泉太郎は円了が長岡を去った後、明治十一年九月～明治十六年三月まで、長岡学校に勤務し、短期間ではあるが、第六代の校長となっている。転々と学舎を変えなければならなかったのも円了の所為ではない。其々の学舎で教えを受けた人物との出会いも因縁であった。歴史から消え去った高山楽群社で初めて円了に英語を手ほどきした栗原某はどのような人物であったのか。

円了の生まれた浦村と石黒塾のある片貝村とは直線距離で6キロ程離れている。子供の脚では一時間半ないし二時間近くをようしたであろう。石黒夫人を感心させた円了の勤勉さは石黒の人間的魅力によるものであったのだろう。円了は漢学に真理を見出せなかったという。これは漢学の講義が面白くなかったということである。石黒の漢学授業ぶりは想像するほかないが、石黒は一、二の上級生を寄宿させ、家族同然に接し掃除を一緒にし、尊王論者である彼は、生徒と共に神棚に礼拝、自身は仏壇に向かい先祖の霊を拝して後、夫婦生徒共に食事をした、というから、授業の外に「談話」することが多かったのではないか。そうであるとすれば、石黒の魅力に引

かれて遠路を通学したのであろう。円了の側から証すべき史料はない。長岡学校では、校長三島は佐久間象山の教えを受けた人であり、石黒と同じように、象山について円了に聞かせたかもしれない。この頃、後に円了が「三恩人」と呼んだ勝海舟と加藤弘之の二人までが象山を介して円了と結ばれていた運命の不思議さを想う。英語教師の藤井三郎（武州）と小林鉄太郎（越前）、洋算教師の奥村金一郎（越前）、高橋貫一（越前）についても円了は何も語っていない。意外なことに、明治九年八月、円了は新潟学校第一分校の洋算授講生に雇われている。洋算教師とは大いに議論したことであろう。十二月一日開校した長岡学校では、漢学の大先輩教師田中春回（天保四年〜明治四十四年）と漢学について協議している。田中春回は藩医田中春東の長男、嘉永六年一月済世館（同年設立された藩の医学教育機関）の助教を命ぜられ、同年四月医学研究のため江戸に出る。江戸では医学と儒学を修めたが、文久三年に藩校崇徳館の助教を命ぜられている。後、国漢学校を経て、明治九年十一月長岡学校に就任以後、明治三十三年まで在職し、明治十九年五月第九代校長に就任している。円了は三年間田中春回との交際を持ったのであるが、この間の事柄については語っていない。余談になるが、法学者渡辺廉吉（嘉永七年〜大正十四年）は田中春回の家塾に通い、国漢学校に学んだ。明治四年十八才の時、柏崎県分校長岡小学校に年給三十円で教員となることを勧められた。廉吉は師の春田と相談したところ「これを喜ばず、是非帝都に出て研学する様、懇々説諭した」（『渡辺廉吉伝』）と伝えられている。授講生という補助教員ながら、明治九年十九歳の円了は自立した青年であったが、円了は、大きく変化する時代の渦に巻き込まれた木の葉のように漂っていた。

二　学生時代（第二期）

二―一　出郷

先に引用した、新潟学校第一分校における英学は「二年未満で卒業し、ただちに授業生となりて、教鞭を執るに至れり」の文言を素直に読めば円了は英語教師のようであるが、先に述べたように、数学の授業生であった。これに続けて円了はいう。「かつその英語を読むや、変則流の訓訳にして、読み方のごときはNightをニグフトと読み、Oftenをオフテンと読みたるほどなれば、他は推して知るべし。その後東京に出でて、……」（『同前掲書』）、と。これは円了一流のユーモアで、明治十六年秋の英文手稿「稿録」（喜多川豊宇「井上円了英文稿録解」斎藤繁雄編著『井上円了と西洋思想』所収に復刻あり）を見れば、その実力の程は分る。

さて、先に引用した「余が信仰の告白と来歴の一端」の後段で円了は、長岡学校を退職して東本願寺の教師教校を経て東京大学入学・卒業、学校設立の決意に至る来歴を語っている。「明治十年大谷派本山に於て末寺出身中英学を修めたるものを京都教師校内英学部に召集することになり、余にも至急上洛せよとの命を伝え来れり、是に於て同年夏、即時に旅装を整えて京都に上りたり、在洛半年に満たずして本山より東京留学を命ぜられ、翌年即ち十一年春東上し、其秋東京大学予備門に入学したり、明治十八年大学文学部を卒業せしに当り、本山より京都に上り教校に奉職すべしと命ぜらたれども、余は意見を具伸して固辞したりき」。この文言においても円了の積極的行動は見られない。

幸にして、京都へ上ったときの日記が復刻されているので、その旅の様子を見よう。円了が記録している途中の風景などについての印象は省略する。新田幸治氏は『屈蠖詩集』に明治十年作の漢詩が五十四首載録されてい

ることを報告している（新田幸治「井上円了の漢詩について」選集十五　解説）。『屈蠖詩集』末尾の「履歴」に「長岡校へ転じては英書を中野梯四郎越后に問い、漢学を田中春回に謀る」と述べているが、詩集の第三・第四は各々、中野梯四郎へ贈ったものである（「留一律謝中野先生」、「離莚賦一絶贈中野先生」。以下同じく題詞のみを記す）。

◎西京紀行『漫遊記　第1編』（『井上円了センター年報』vol. 1）

明治十年丁丑の夏故ありて西京に上る。余時に長岡中学の教斑に列す。六月三十日校を辞して家に帰る。

七月　八日　早朝出発高取村で友人・親戚との送別会。夜、柏崎着（漢詩あり「早行」七月八日）

九日　柏崎発―乗船―蛎崎を経て、日暮れ今町港着。（漢詩あり「泛越海」八日）

十日　今町発　荒井駅―関川駅着（郷里から三十余里）。

十一日　（越後から信州へ入る）午後3時善光寺着　寺に参る。

十二日　善光寺の開帳、市内見物後　丹波島―篠井駅―午後桑原駅―青柳駅

十三日　午後松本着　（郷里から五十八里余）

十四日　木曾路　宮の越―福島

十五日

十六日　野尻発　（越後国境より五十余里）（漢詩あり「入美濃国」）

十七日　中津川発　御嵩の宿

十八日　加納駅（大垣と岐阜の間）　河渡川を渡り美江寺に泊まる

十九日　関が原―米原
二十日　米原発　―乗船―大津着（十一時過ぎ）―山科（昼食）―京都六条
（京都の感想：言接巧美動作閑雅実に皇都の遺風あり）（漢詩あり「江州路」）
二十二日　東本願寺に参る、京極四条見物、二十三日　西本願寺、二十四日　祇園社。
八月　七日　二条城、十一日　豊国神社、三十三間堂、十二日　清水寺、大谷廟、十八日　六角堂、知恩院、円山の温泉場、二十日　大徳寺、加茂神社、二十一日　東寺、二十二日　南禅寺、永観堂、黒谷真如堂。京都滞在一年。

円了の旅は、八年前、北海道開拓・教化のため門主厳如に代って北海道に向った十九歳の現如が通った道をほぼ逆に途っている。明治三年に現如が長岡に立ち寄った時、慈光庠に学んでいた十二歳の円了は、現如を出迎える信徒の中にいなかったのであろうか。それはともかく、円了は教師教校で学ぶことになった。教校設立の前年明治七年月から本山寺務所の録事として教務課の録事を兼務していた南条文雄は、円了が「育英教校」の生徒であったといっているが、記憶違いであろう（必らずしも記憶違いといえないことは『真宗史料集成』第十二巻・「真宗教団の近代化」p・26にも清沢満之・稲葉昌丸・井上円了は育英校教に在籍し、「この育英教校は月額五円の給費生で厳選して施す俊才教育であった」とある）。南条は「教師教校」は「今日の師範学校のような意味で制定されたものであるが」、「育英教校」は「大変大きな希望のもとに生まれたものであった。まず在学勉強の期間は二十年というのである。その代わり卒業の暁は位準連枝に列するというのであった。したがって入学試験もなかなかむずかしくてそのとき入学しえた者は当時の秀才がほんの少数通過したばかりであった」（『懐旧録』p・84）、といっている

が、「教師教校兼英仏学科」については述べていない。開校当時の「教師教校条規」（明治八年七月二十二日）には生徒の選抜方法は「寺務所七級以上の役員及学師説教者をして其器に当る者を撰ばしめ撰挙人より之を呼ばしむ出京の上新入検査法に照して之を検査し及第の者に限り入校を許すべし」と、推薦制であるが、明治十年一月改正の「教師教校規則」では応募制に変更されている（第二条）。学期は「学年は九月二日に始まり七月三十一日に終る。而して九月二日より二月二十八日までを前半期とし、三月二日より七月三十一日までを後半期とす」（第五章　学年）、とあるから、円了は入学まで京都見物をしていた。教師教校の目的は「中小教校の教師となるべき者を陶冶育成し兼ねて専門科に入りて教師たらんと欲する者を教授する所なり」（第一章　通規）とされ、円了は各県に設置されていた中・小教校の教師になる予定であった。一ヶ月五円の支給を受け（第二章第十四条）、教師としての義務年限三年が規定されていたのである（第二章第二十条）。しかし、円了は翌年後半期の途中に東京大学予備門入学のため、四月二日には上京の途についているので、教師教校の在学は実質的には前半期のみである。円了の京都行きが慌しかったのは、明治十年七月に増設された「教師教校兼英仏学科」への入学であったからである。円了の行動は「本山の命」に忠実な「釈円了」の自覚に基づいている。

二―二　東京大学予備門へ

東京大学予備門の入学も「本山の命」によるものであった。円了は転校について語っていないが、新設の「教師教校兼英仏学科」に慌しく呼び寄せておきながら、折角入学した教師教校を僅か前期を終っただけで、全く教育理念の違った東京大学への転校を命じることは、円了がいかに優秀な学生であったとしても、本山の「教師教校兼英仏学科」に対する自己否定である。明治六年の「学制」では、「大学ハ高尚ノ諸学ヲ教ル専門科ノ学校ナ

リ其学科大略左ノ如シ理学　化学　法学　医学　数理学」（第三十八章）とされ、後の帝国大学令（明治十九年勅令第三号）は「第一条　帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル学術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス。第二条　帝国大学ハ大学院及分科大学ヲ以テ構成ス大学院ハ学術技芸ノ蘊奥ヲ攷究シ分科大学ハ学術技芸ノ理論及応用ヲ教授スル所トス」、と規定されている。円了が大学を卒業した時、本山が「京都に上り教校に奉職すべし」と命じたのは教師教校における西欧の語学・宗教・哲学などの充実を願ったからであろう。そのために東京大学に有望な僧侶を留学させたのは当時の功利主義的風潮によるものであろうか。円了が「俗人となり、世間に立ちて活動せざるべからざる理由と東京にとどまり独力にて学校を開設せん志望とを開陳し、自説を固執して山命に応ざりしのみ」と、世俗にありながら「釈円了」の自己実現を目指した気持ちはあながち非難出来ない。この東京留学が東本願寺の制度的なものか（貢進生）、個人的な推薦によるものか不詳である。

二―三　東京大学時代

京都で「皇都の遺風」に感慨を語った円了は東京については何も語っていない。円了の東京時代の行動を伝える直接史料は先の二紀行に続く『漫遊記』の八紀行（予備門時代）と『同　第二編』（大学入学直前から卒業直後まで）の十編である。念のために言えば、大学の三学期の期間は、一学期は九月十一日～十二月二十四日、二学期は一月八日～三月三十一日、三学期は四月八日～七月十日であるから、「冬夏遊跡」の「帰郷」を除いて、円了は律儀に休暇期間を守って旅行している。この期間の漢詩が『屈蠖詩集』に収録されているので（新田「前掲論文」）、両書を対比すれば、彼の感慨を知ることが出来よう。

旅行と執筆

『漫遊記　第一編』（明治十一年九月　予備門入学）『漫遊記』中の漢詩で『屈蠖詩集』に収録されているものは題詞のみを記す。

◎江島紀行鎌倉紀行附（明治十二年一月二日～四日）金北、江村と同行。（「過鎌倉有感」）

◎日光并奥州紀行（明治十二年七月十四日～二十八日）故郷長岡へ。学友渡辺と同行。（「宇都宮街道」、「抵白川」、「若松雨夕」、「下津川」）

◎帰京途中記（明治十二年八月二十三日～九月一日）故郷から東京へ。（「三国路線」）

◎熱海紀行（明治十二年十二月二十五日～明治十三年一月七日）（「熱海路」、「温泉楼」、「宮中除夕」、「熱海帰路」）

◎銚子紀行（明治十三年四月二日～七日）

◎寓居記事（明治十三年七月）夏休み同窓四・五人と磯川久堅坊に滞在。（「夏目閑居」、「玉川観月」）

◎相州遊記（明治十三年十二月二十五日～明治十四年一月二日）弧樵処士と同行。

◎再遊熱海記（明治十四年三月二十九日～四月九日）試験終了、同窓と同行。

『　同上　第2編』（明治十四年九月　東京大学入学）

◎箱根客寓（明治十四年七月十一日～九月四日）避暑のため。中島広、和田睦と同行。（「大磯旅夕」、「箱根客舎　其五・其十・其十二」）

富士登行（明治十四年八月四日～）箱根滞在中、同宿の三人と。（「富嶽登望　其二」）

◎房総漫遊（明治十五年三月三十一日～四月九日）房州一周旅行。＊添田［寿一］、＊浜田［健次郎］、＊中川［恒次郎］、＊加藤［彰廉］と同行。

◎北越遊行（明治十五年七月六日～七月九日）郷里浦村へ。仙田と同行。（「夏山雨景」、「村居雨後」）
（明治十五年八月～九月七日）魚沼郡広瀬郷に遊ぶ。
◎筑波紀行（明治十六年八月三日～十二日）藤井宣正同行。（「再遊常総」、「暁行」、「笠間晩望」、「水戸浜街道」）
◎冬夏遊跡
熱海（明治十六年十二月二十五日～明治十七年一月四日）
＊土子［金四郎］、＊浜田、＊本間［栄三郎］、＊藤山［祐二］、＊久米［金弥］、＊中川
同行。
江ノ島（明治十七年四月六日～七日）＊長崎［剛十郎］、川村、＊加藤同行。
［＊印は明治十二年年度政治学理財科第二学年在籍、十二人中八人。長崎は明治十二年度哲学・政治学科第一年在籍、円了と同級。山口静一「講演・フェノロサと井上円了　資料2―1」（センター年報　vol. 1 p. 30～31）］
帰郷（明治十七年七月十六日～九月十九日）三島郡、長岡、新潟、三条、新津、鳥越周遊。九月十四日帰京の途に着く。
◎府下遊処（明治十七年四月～十一月十一日）六年間に訪れた東京の名所旧跡名と回数。
◎豆州漫遊（明治十七年十二月二十六日～明治十八日一月六日）松本、藤井、吉村、中川、三宅、雪埜同行。
◎秩父遊行（明治十八年四月一日～七日）＊棚橋一郎（第二学年和漢文学科）と同行。
◎帰省第四（明治［十八年］七月十八日～八月三十一日）
八月三日～十三日　母と栃尾又に入湯行き。円了大学卒業。

学生時代の執筆は主として学期中に行われたと想われるが、「読日本外史」（「東洋学芸雑誌」25号・明治十六年十月二十五日）は「稿録」末尾（未完）の「外史評論」を完成させた論文と想われるし、「主客問答」（「開導新聞」一四八号～一六七号・明治十四年十月十一日～二十五日）の冒頭部分に「余一夕客舎（相州湯本の温泉場―筆者）ありて……」と、客と対談したという舞台設定をしているが、「相州湯本の温泉場」は『漫遊記　第二編』の「箱根客寓」（明治十四年七月十一日～九月四日）の避暑旅行における友人との対談の様子を彷彿させる。『哲学一夕話』（一編明治十九年七月・二編明治十九年九月・三編明治二十年四月）にも「余かって小汽船に乗じて某地を往復するの際、……」とあり、同様の舞台設定である。円了は旅行中に記録し、整理し、思索することを怠らなかった。まさしく円了は動きながら考え、考えながら動くタイプの人であった。後年、巡講の旅の途上にあっても各地で妖怪の研究資料を収集している。また、このように述懐している「例えば、汽車、汽船、に乗るときのごとき、あるいは途中人を待つときのごとき、あるいは夜中寝に就きて眠るあたわざるときのごとき、むなしく時間を消費せざるを得ざる場合に、なるべくその時間を利用せんと欲し、目に触れ心に浮かびたる種々雑多のことにつき工夫を凝らし、ときとしては新案を思いつきたることあり」と（『改良新案の夢』妖怪叢書第2編　明治三十六年十二月　選集十九・p・479）。大学時代の執筆活動は次の通りである（『井上円了関係文献年表』による）。

明治十四年（この年九月東京大学入学）

「主客問答」（「開導新聞」一四八号～一六七号・十月十一日～二十五日）選集二十五所収。

明治十五年

「耶蘇防禦論」（「開導新聞」一八八号～一九〇号・一九二号・一月十一日～十九日）

「堯舜は孔教の偶像なるゆえんを論ず」（「東洋学芸雑誌」「哲学会機関誌」九号・六月二十五日）選集二十五所収。

「僧侶教育法」（「開導新聞」二八五号～二八八号・八月三～九日）選集二十五所収。
「宗乱因由」（「仏教演説集誌」八月二十二日）
「宗教編」（「開導新聞」三一五号～三五二号・十月五日～十二月二十五日）選集二十五所収。
明治十六年
「黄石公は鬼物にあらず又隠君子にあらざるを論ず」（「東洋学芸雑誌」二〇号・五月二十五日）
「読日本外史」（「東洋学芸雑誌」二五号・十月二十五日）「稿録」末尾　参照。
明治十七年
「排孟論」（「東洋学芸雑誌」二八号～二九号・一月二十五日、二月二十五日）
「哲学要領」（「令知会雑誌」一号・六号～九号・四月二十九日～十二月二十一日）
「加藤先生の一大疑問に答えんとす」（「東洋学芸雑誌」三三号・明治十七年六月二十五日）
「読荀子」（『学芸志林』［東京大学機関誌］一五一八五号・明治十七年八月）選集二十五所収。
「耶蘇教の畏るべき所以を論ず」（「明教新誌」一七五三号・十月二十四日）
「耶蘇教を排するは理論にあるか」（「明教新誌」一七五六号・一七六九号・十月三十日、十一月二十六日）
「余か疑団何の日か解けん　耶蘇教を排するは理論にあるか」（「明教新誌」一七五九・一七六一・一七六三・一七六五・一七六九・一七七七・一七七九・一七八一号・十一月六日～十八日、十二月十二日～二十日）
「孟子論法を知らず」（「東洋学芸雑誌」三八号～三九号・十一月二十五日、十二月二十五日）

以上の旅行と執筆活動を総合的に見ると、円了の学生生活は実に充実している。執筆内容はキリスト教批判、西

洋哲学史（「哲学要領」）、孟子批判、仏教改良など、多様であるが、入念に構想された論文が多い。「哲学要領」と「ヤソ教を排するは理論にあるか」は連載を続けられ、後に『哲学要領　前編』（明治十九年九月刊）、『同書後編』（明治二十年四月刊）、『真理金針　初編』（明治十九年十二月刊）、『同書　続編』（明治十九年十一月刊）、『同書　続々編』（明治二十年一月刊）として完結されている。これに止まらず、「英文録稿」が物語るように、円了は英語文献を丹念に読み、抜書きしながら勉強している。なお、右の論文の中「主客問答」、「耶蘇教防禦論」、「僧侶教育法」、「宗乱因由」、「宗教編」については、三浦節夫「井上円了の初期思想―『真理金針』以前」で考察されている。

「読荀子」は円了の卒業論文である（通史1・p・51）。大学第三学年の三島毅担当の漢文学に『荀子』の輪読があるが、円了は管見の及ぶ限り卒業論文について語っていない。卒業の年、円了は前年より中村正直から受けていた『易』の講義を「卒業論文の支度に従事すとて」辞退している（三月二日）。中村正直は、『敬宇日乗四』六月二十二日に「井上円了易試験」、七月八日に「大学に参ル井上円了卒業証書に調印す」と記録している。卒業論文の題名は記録されていないが、小泉仰氏は「ここで円了は『読荀荀子』というテーマの卒業論文を提出して、めでたく東京大学を卒業したことになる」と述べている（小泉仰「『敬宇日乗』における中村敬宇と井上圓了」・『井上円了センター年報』vol.7所収）。猶、井上哲次郎は「予は〔井上円了〕博士の卒業論文を見たが、それは可成り好く出来ていたように思う。題は墨子の哲学と云うのであった。当時大学より発行していた学芸志林に掲載したので、今日でもそれを見ることが出来る」（井上哲次郎「井上圓了博士」・三輪政一編『井上圓了先生』所収、大正八年　東洋大学校友会）といっているが思い違いのようである。何故、四聖と崇めるアリストテレス、カント、孔子、あるいは釈尊を課題に選ばなかったのか。基本史料が得られないので推測する外ないが、西洋哲学思想の

時代的意義を認めていただけに疑問が残る。円了は「明治三十五年を迎うるの辞」（『甫水論集』一）において、「明治の三代」について、学生を三代目とし、一代目を天保～嘉永生まれの人、二代目を安政～慶応生まれの人としている。これは蘇峰の「天保生れの老人」と共通の意識である。円了が東京大学で指導を受けた人々は洋学者であれ漢学者であれ「天保生れの老人」であり、原坦山、吉谷覚寿の仏教者は別として、儒教的精神世界に育った人たちである。彼らの多くが青年時代に洋学を学んだことは先に見た通りである。彼らは洋学に転じることによって、自ら当然としていた儒学を客観視することを迫られ、「道の学」は「科学」へと変化せざるをえなかった。西洋の学に対応して、儒学は支那学（漢学）でなければならない。では、仏教はどうであったであろうか。明治の第一代に属する漢学者の洋学との対決ないし折衷について、筆者は詳説するだけの知識はないが、西村茂樹『日本道徳論』（岩波文庫・解説）の折衷主義は、円了が仏教に対して採った発想と深部において連がっていると思う。明治の一代目の学者たちが活躍した学会に東京学士会院があり、その学会誌（明治十二年～三十三年）に西村茂樹、三島毅等漢学者の論文が多く見られる。内容は未見であるが、西村に「性善説」（3―6）、細川潤次郎に「洋人性を論ずる荀子に似たることを論ず」（4―7）、「性を論ず」（6―3）、洋学者の津田真道に「性説」（18―4）など『荀子』に関連する論文が見られる。円了の問題意識は個別問題に在るのではなく、『荀子』という思想世界自体にあったのではないか。円了は、結論部分で「その論の一局に偏するは、時世の勢いやむをえざるに出でて、全く荀子の罪にあらざるなり」と述べ、荀子の諸説は「みな時弊を救わんとするの術策」であるとする。円了は、解体再編を迫られ苦闘する儒学者諸師が儒教の諸要素を再解釈して、時代に適用させようとする試みに倣って、同様に低迷する仏教を視野に入れて、異説として非難させられた荀子を評価する実験の場として『荀子』を選んだのであろう。西洋哲学の諸説を荀子の個別説に附合させる論調は円了の仏教に対する

論調、儒学者が儒教に対して採ったそれと軌を一にしている。

二―四　研究会活動

如何なる時代であっても、言論活動は社会文化向上の推進力であった。仏教説話に関する説教や法談は民衆の知識の向上に有効な伝統的手法であった。夙に福沢諭吉は『学問のすすめ』第十二編（明治七年十二月出版）の「演説の法を勧むるの説」において、演説は古来より日本には無かったようだが、「寺院の説法などは先ずこの類なるべし」、と唯一の類似を仏教の説法に求めている。彼は「学問の要は活用にあるのみ」として、学問することの条件に視察（ヲブセルヴェーション）、推究（リーゾニング）、読書、談話、著書演説を挙げ「視察、推究、読書はもって智見を集め、談話は智見を交易し、著書演説は智見を散ずるの術」である。この中には「一人の私をもって能すべきもの」もあるが、談話と演説は一人では出来ないものであって、ここに演説会が「要用」となる（岩波文庫　p・107）。著書と演説の違いは「文章に記せばさまで意味なき事にても、言葉をもって述ぶればこれを了解すること易くして人を感ぜしむるものあり」、と「話しことば」の効用を強調している（同　p・106）。福沢の意味付けは演説・談話の新しい効用を当時の人々に知らしめたことであろう。福沢に教えられるまでも無く、円了は幼い時から法話の場を体験していたことでもあり、ここに集う者達の強い同朋意識と結団力を感じとっていたことであろう。円了は明治十五年八月の論説「僧侶教育法」の第五に「討論演説を設くること」を提案し、討論演説することは「志力を養成」し、「知力を進達」し、「学問を実際に活用」するものであると断じている（選集二五・p・702）。そうして自らこれを実践したのである。円了が設立に参加した研究会は次の通りである。これらの会で得た人脈は円了の将来の活動にとって大きな資糧なったのである。

〔長岡学校での和同会　明治九年十月二十一日（通史編1・p・32）〕（相互の親睦を厚うし、演説の稽古を、為さん）
〔教師教校での「一々社」明治十年（通史編1・p・38）〕
◆文学会・明治十六年十月再興（通史編1・p・47）政治、経済、哲学、和漢文の研究会。後、哲学会と国家学会に分かれ解消。会員・加藤弘之、外山正一、和田垣謙三、岡倉覚三、三宅雄二郎、穂積八束、岡田良平、添田寿、棚橋一郎、金井延など。
◆東京大学での哲学会　明治十七年一月二十六日（「哲学の必要を論じて本会の沿革に及ぶ」選二十五・p・745～p・749）会長　加藤弘之、副会長　外山正一、書記　岡田良平。徳永満之。
◆不思議研究会　明治十九年一月24日（通史編1・p・54）三宅雄二郎、棚橋一郎、箕作元八、など。
◆令知会入会　明治十七年三月（通史編1・p・50）目的「教法及教法に関係ある諸種の学術を研究し、兼て興学弘教の為め尽力周旋する」。設立時の会員：島地黙雷（＊2・23）、吉谷覚寿（＊6・15）、大内青巒、寺田福寿（＊18）、藤井宣正、井上円成、井上円悟、南條文雄（＊12）など。［＊の数字は哲学会での演説。東大系も参加］

二―五　仏教主義に立つ

しかし、当時の仏教界の状況は円了に哲学研究のみに止まることを許さない。文飾されているが、「宗教編」の冒頭で「余は白面の一寒生なり。つとに身を教法に帰し、幸い命を本山に奉じ、東西師を求め、朝夕学を修め、なおいまだかって一日も寧居安臥せず。その間、簞食わずかに飢えを支え、……一片の丹心常にわれを護するありて、満身ために暖を覚ゆ。その心、あに片時も教法を忘れんや」（選集二五・p・705）と述べている。

「宗教編」は円了が明治十五年八月帰郷した時（『漫遊記』第2編「北越紀行」参照）、有志数名の依頼に応じて行った講義を骨子としているが、彼は「護法のために益することあらば」と、この講義をひきうけている（選集二五・p・705）。これにより円了の哲学研究の真意が那辺にあったかが知られよう。理論を尊重する彼は諸宗教を客観的に評価しているが、「わが人民のヤソ教を信ずるは、多くその教旨宗義の良否を問わず、ただ仏教のごときは貧民愚者の法にして、これを奉ずるは自ら不面目と考え、ヤソ教は開化の道なり学者の教なり、むしろこれを信ずるは仏教に勝るとひそかにこれを許すのみにして、別によるところにあらず」（『主客問答』選集二五・p・687）と、宗教の時代的風潮を揶揄し、両教のわが国に対する利益を論じてヤソ教を排している。また「わが国維新以来、年なお浅くして、いまだ宗教を一定するにいとまあらず。そのすきに乗じて英、仏、魯、米、みな相争い来たりてその国教をわが国に入れんとす。魯教を伝うるものはみな魯国のためにせんことを思い、……米は米のためにす。もしかくのごとくんば、わが国一日も立つべからず」（『同上』p・688）と、欧米列強諸国の植民地政策を危惧し、「人心を結合」するために、仏教はわが国に伝来して以来千年以上も経つのであるから「これを一定して民心を結合するは、ヤソ教を用うるにこれを較すれば、その難易遅速はほとんどいうべからず」と国民の宗教心を重視し、一方、当時の貿易の不均衡は洋品に対する偏好が原因であると、東本願寺の佐田介山が主張した国産品愛用運動（通史編1　p・60参照）と主張を同じくしている。一方、仏教の改革、特に僧侶の道徳改善の必要を力説している（『同上』p・690）。ここで円了が宗派として浄土真宗を選んでいることは注意しておきたい。回顧談ではあるが、大学で哲学科を選んだ理由をつぎのように述べている。「今日仏教の衰退は一方においては理化学の流行その一源因たるをもって、理化学に対して宗教の真理を開示するには必ず哲学によらざるべからず、また一方にはヤソ教の浸入その一原因たるをもって、ヤソ教を排して仏教

を振興するにはまた哲学によらざるべからざることを発見せり。すなわち当時余の考うるところを記すれば左のごとし。理学上よりヤソ教を排斥するものは哲学なり／理学に対して宗教を保護するものは哲学なり」（『教育宗教関係論』明治二六年月二九日・選集十一・p・441）。これが円了の真意であったといってよい。

円了を仏教主義に立しめたものは何であろうか。第一に「釈円了」の意識であり、第二に教育を通じて近代的僧侶を養成し、仏教を近代化するという使命感であった。円了にとって、仏教の近代化とは「新宗教」つまり「開明世界の宗教」（『仏教活論序論』）を創立すること、後の言葉でいえば「哲学宗」（「哲学上に於ける余の使命」）を開くことであった。

学生時代の円了は将来を約束された学士候補者・「大学生」として情熱に燃え、旅行では同僚と「談話」し、研究会で先輩に混じって「演説」し、新しい社会の空気を存分に吸って、見聞を広め、次第に使命に目覚めて行った。円了が哲学を選んだ目的は、東本願寺の護法場以来の課題であり、特に新しいものではなかった。円了の創見は目的達成の方法として普遍性のある哲学を選び、哲学専修の学校を設立するという点に在る。円了は既成の教義宗教・教団を超えた視点に立っていた。しかし、現実は厳しく、東本願寺の了解を得るための苦労は我々の想像を絶したものであったであろう。

二―六　決断と契機

以下は卒業当時の円了の職歴である。文部省も東本願寺も円了に「印度哲学」の研究を求めている。この限りにおいては、三宅雄二郎の例（日本仏教史編集）もあり、研究の場は与えられているから、この要請を断る理由はない。これを断ったのは、この時点での円了の問題意識が仏教の中に西洋の形而上哲学の要素を見出し、仏教

を改良するためには西洋哲学を優先するという点にあったからであろう。「俗人となり、世間に立つ」ことは「釈円了」の自己否定ではなく、円了の方便であったといえる。円了の信頼の厚かった三石賤夫は、円了の七恩人として、「勝安房伯、加藤弘之博士、目賀田男爵母堂、石黒忠悳男、井上毅子、松本正一郎氏、高須駑氏」を挙げている（三輪政一編『前掲書』p・157）、円了の成長を見守り続けた石黒直悳は、円了が卒業した時、文部大臣森有礼に円了を推薦したが、円了は「御思召は誠に有難いのですが、素より私は本願寺の宗費生として大学に居た事であるから、官途に就くに忍びないのみならず、且つ日頃の誓願として、将来は宗教的教育事業に従事して、大いに世道人心の為に尽瘁してみたい心懸だから」といって、これを辞退したといっている（三輪政一編『同前』p・36）。この本願寺に対する恩儀の念は円了の本心であったであろう。また、円了の保証人でもあり、葬儀の導師を務めた南條文雄は卒業式に列席した、その日に東本願寺の執事渥美契縁師に対して「偖て井上が学士になった、各宗中始めての学士である。本願寺でも早く何とか優遇の道を講じなければ可かぬ、それでないと逃げてしまう」と献言したという（安藤正純「甫水先生の三禁三跡」・『同前』p・331）。東本願寺は円了に対して「印度事情取調掛」の辞令を出した。安藤はこれを評して「少し見当違いであった」と非難している。しかし円了は先輩南條文雄の気持を知っていたならば、感激したことであろう。円了が最初、「大谷教校高等科」で心理学を講じていることは、このことを物語っているのでははいか。大谷教校を辞職した時期は未詳であるが、これを辞職して「通信講学会」講師に就く時、円了は今まで巻き込まれていた渦から脱し、主体性に目覚めたのである。西洋哲学の研究（「哲学要領」）も反耶蘇的論説も従来と変わらず続けられている。

明治十八年（動向）

〈井上円了、東京大学卒業〉「本山報告　一」（七月二七日）

東京大学官費研究生：「官報」（七月二九日）、「令知会雑誌　18」（九月二十一日）、印度哲学研究
印度哲学取調掛：「本山報告　4」（十月二五日）
大谷教校高等科で心理学を開講：「令知会雑誌　20」（十一月二十一日）
明治十九年
通信講学会心理学講師：「教育時論　26」（二月五日）
［通信講学会は明治十八年十二月、湯本武比古など「教育時論」の関係者によって教育学、心理学、倫理学、論理学、経済学、生物学、数理などの学科を学校教員や修学の志ある者に教授するために設立された通信教育機関（通史編1　p・54）］
大学院入学：「教育時論　37」（四月一五日）、「本山報告　11」（五月十一日）、［四月より病気長期療養のため辞退（同前　p・55）］

参照

○明治十八年十二月二十四日～明治十九年［一月］十四日、痔疾の為め本郷大学病院にはいる。
同十九年四月十四日、切断を施す。
同十九年五月二十日頃、咽喉かたるを起こす。
同二十年二月三日の際、三・四回血痰をはくことあり。同二十年十月二日、夜喀血。（「実地見聞集」第2編　283「病気年月」・「円了センター年報」2　p・95～96）
○『宗教新論』（明治二十一年三月）緒言「この論は『仏教活論本論』第1編（破邪活論、明治二十年十二月刊）と同時に世に刊行するの意なりしが、当時不幸にして病魔にかかり、読書、著作を廃せしをもって、その起稿を

延遷するに至る。しかるに今ここに病を熱海に養いやや快を得たれば、毎日一時間、人をして余が口述するところのものを筆記せしむ。すなわちこの一編なり。」（選集八・p・11）

○明治二十年十二月二十三日～明治二十一年三月七日の七十六日間、熱海温泉で経験した百夢の種類、夢の中の場所を分類・分析した結果、「しかして病気の夢、これを他種の夢に比するに、その割合やや多きは、当時、病気療養のためその地にありて、多少懸念するところありしによる（『妖怪学』「夢想論」明治二四年十二月五日、p・73、『甫水論集』二十五「熱海百夢」選二十五、p・245～）

ここに円了の闘病歴を紹介したのは、この病気は円了のいう「三災」に先立つ「第一災」であるからである。円了の人性には、決断し飛躍する時、必ず「旅と災難」が付きまとっている。

大学を卒業した円了は国家からも大谷派教団からも将来を託されていたが、この両方の要請に応えることができなかった。国家はともかく、恩顧のある教団に対して「還俗」（俗人となり、世間に立ち）してまでも自己の信念を貫こうとする決意は並大抵のものではない。「還俗」には至らなかったが、円了の心の葛藤は想像に絶するものがある。この苦悩の中にあっても、彼は執筆を続けて自己の信念を世に訴えている。少年時代石黒忠悳を感嘆させた意志強固な円了も遂に病気のために倒れて長い療養生活を熱海に送ることになった。闘病の期間は少なくとも二年に及ぶと推測できる（明治十九年四月～明治二十一年三月）。

しかし、病気療養も「心理経済を論じ、精神の運用上に一種の経済法あることを唱え」ていた円了にとっては、一つの行動であった（『甫水論集』二九「心理的経済」選集二五・p・266～）。この間も思索と執筆を休むことは無く、思想界に円了の名を轟かせた『仏教活論序論』と『仏教活論本論　第1篇』を著している。『仏教活論序論』によって、我々は新宗教開宗宣言―「仏教を改良してこれを開明世界の宗教となさんことを決定するに至る。

これ実に明治十八年のことなり。これ余が仏教改良の紀年とす」―を知るのである。

小結

第一期の円了に関する報告は基本史料に重点を置いた関係上、史料の羅列に終った感が強い。与えられた紙面の関係上、先行研究に言及することが出来なかったが、第一期に関する研究は少ない。これは当然のことで、円了が対自的に思想を表現するのは第二期であり、第一期の思想は、即自的に時代や環境から創出されるゆえ、自明のこととして、表現から脱落するからである。本稿は第三期の具体的行動と思想を見据えて、いわば自明とされる部分に焦点を当てた。

一、円了は「釈円了」の自己に目覚めた。初等・中等教育は、一般的風習に倣って、儒学的要素が濃厚な「変則」教育を私塾に於いて受け、中等教育の後期に「英漢数」を公立の長岡学校で学んでいるが、これも「変則」であった。つまり公的規制が希薄で、指導者個人の思想が濃厚な教育環境で育った。それだけに自由であった。

二、第二期の思想の前提となる第一期の教育境涯の特性は、政府によって教育制度は創られたとはいえ十分に機能せず、指導者の思想・人格の影響が強かったことである。従って彼らが創った教育・文化風土を考慮しなければならない。直接指導を受けた石黒忠悳、三島億二郎は東京帰りであり、しかも佐久間象山に直接・間接に指導をうけた。特に三島は小林虎次郎と共に大参事として廃藩後の郷土の復興に尽くし、復興政策の第一を教育とした。この三島が長岡学校の校長であったことは、円了の後期の思想と行動に潜在的に作用したであろう。この潜在性が後に顕在化するのが勝海舟、西村茂樹、加藤弘之たち象山門下の人達との出会いで

ある。円了の第二期の発想と行動形式は象山を淵源とする儒学・洋学折衷主義の系譜に位置づけられよう。これを円了の行動の中に見ることが次の課題である。其の為には、『履歴書』二本に見られる書籍の比較と分析を基礎として、大学時代の多方面にわたる論文と著書、その源泉となる思索と読書の実態を探索しなければならない。報告としては、この点が欠落しているが、別稿に譲りたい。

（2006・5・3稿了）